

「みさご」は「人をおそるゝ」か

—『方丈記』の歌のわかれ—

下 西 善三郎*

要 旨

『方丈記』における王朝歌ことばの受容が指摘されている。しかし本稿は、むしろ『方丈記』における王朝歌ことばからの離反の様相を指摘する。『方丈記』が王朝の伝統的表現世界を引用するとは、王朝伝統言語を踏まえ、かつ、ずらす、という手法においてそうなのであった。たとえは『方丈記』は、歌語「みさご」にあらたに意味を賦与して用いる。それは、つまるところ、王朝和歌世界が共有してきた知識を、超脱ないし逸脱しようとするものであった。『方丈記』は、歌語をもちいながら歌語の領域を超えようとし、王朝の共通理解の範囲内の題材をもちいながらその範囲を超えようとする意志をひそめ、実行した散文なのである。そこに「中世的」と評しうる『方丈記』の文体価値がある。『方丈記』とは、表現の個々の部分に典拠をすえ、すえた典拠からの逸脱をはかることによって伝統言語を超えようとする記述の過程そのものであった。

KEY WORDS

変容と新生 metamorphosis & rebirth
王朝和歌 Japanese poem in Heian period

引用 quote
典拠 authority

1 「和文的表現」性

漢文体の「家居の記」の表現伝統をうけつぎ、より直接的には慶滋保胤『方丈記』に範型をもとめて書きつむがれた『方丈記』は、しかし、「記」という漢文の文章スタイルそのものからは離れることで、自己の文章のあらたな編成をこころみようとした散文であった。⁽¹⁾

むろん、『方丈記』の文体印象は、一読、漢文訓読体の硬質さを感じさせる。和漢混淆文の典型とされる『方丈記』の、漢文訓読調の文体印象は、また、まぎれようもない。
だが、こんにち、『方丈記』の文章について考えようとするわれわれのまず共有すべき知見は、つぎのようなものであるだろう。
浅見和彦は、多方面からの検討を経て、つぎのようにいっている。

* 言語系教育講座

「漢語や漢文訓読語などの使用を極力押さえ、和語を中核に、それも歌語や和歌的発想を積極的に利用して、まとめあげられて⁽¹⁾いる。」

浅見によれば、「方丈記」は、「実は訓読体を軸としながらも、和語や和文的表現を少なからず取り入れたもの」であって、むしろ実態は、「和文脈的表現」に特徴をみいだすべき文章なのであった。

たしかに、つみあげられてきた『方丈記』の典拠研究は、『方丈記』の文章の「和文脈的表現」へのよりかかりをあきらかにしている。『方丈記』の注釈を始発させた近世から現在にいたるまで、典拠研究は、諸注が力をそそいだ主要な部分であった。そこでは、『方丈記』の表現根拠と推定されるいくつもの王朝和歌の言語が、指摘されてきたのである。

だが、出典調査に自足する危険性をはらんでもいる典拠研究は、用例としての先行表現の指摘にとどまることもしばしばであった。細部のつまかさねにおいて近世注をしのぐ現代の諸注釈書も、典拠の博搜という態度において、江戸期注釈書にほとんどかわらぬ様相をしめすようにみえる。博搜された典拠にもとづいて、さて、『方丈記』の文体についてなにをいうか、という点からみれば、現代の諸注は、かならずしも近世注をのりこえてはいない。

典拠研究は、表現のありかたをかんがえさせるとばぐちにわれれを立たせる。近いところでは、前記浅見論のほか、稲田利徳『「方丈記」の文体』⁽²⁾が、「（方丈記は）先蹤歌の表現や発想を借用しながら、それを自分の文章のなかに融解させている」という観点から、「これまでの注釈書が探り当てていない融解表現」を発掘し、『方丈記』の文章上の方法を考察している。そこからさらに、『方丈記』の文体の成立を問うために、たとえばこんなふうに関

いかけることができないうか。

もし『方丈記』が「中世的」と評しうる文体価値をもつとしたら、『方丈記』の文章は、王朝伝統言語たる「和文脈的表現」による思考・発想に対して、どのような関係をもつことになるだろうか。

2 江戸期の典拠研究から

江戸期以来の典拠研究は、『方丈記』の表現の細部にまでわたる典拠をつみあげてきたが、『方丈記』における王朝伝統言語からの離反的側面、なかんづく和歌表現の受容における逸脱的側面については、みすごしにしてきたのではなかつたろうか。和漢をとりまぜてにぎやかな江戸期注釈書の様相をながめなおしておきたい。

江戸期注釈書の典拠研究では、踏まえた先行表現を指摘すること自体に意味を見いだすような作業が繰り返されている。たんに語例をしめすだけのために一首の古典和歌を引いたり、また、ただ「てには」を説明するだけのために幾首もの歌を引いたりする。それは、ともかくも『方丈記』の表現を先行表現に関係づけて処理しようとする態度をものがたる。だが、ある一語を注するため一首の和歌を引用するとは、それが引歌表現であると考えるところに成立するはずなのだが、じっさいはそうではなく、かならずしも『方丈記』本文の内容との内的連関を有する引証になつているとはいいがたい場合が見られるのである。その用例主義的な情熱に反して、指摘された典拠が本文注としてほとんど有効性をもたないとき、出典調査という作業はしばしば術学趣味におちい

るのであった。

しかし、江戸期注釈書は、また一方で、典拠の指摘が『方丈記』の表現・発想の根幹をほりおこすものであることを自覚して書いた。「歌語や和歌的発想」の摂取という側面においてみれば、江戸期注釈書は、すでにして現行諸注の水準に達する高さにあつたといわねばなるまい。

『首書方丈記』が、「名を外山といふ 正木のかつら」を注して、「古今の大うた所の中に、神遊のうた み山にはあられふるらし外山なる正木のかつらいろいろつきにけり」といへるよりかきいたしたり」（『首書』五三頁）

というのは、『方丈記』の表現典拠としての「古今集」歌を指摘したものであり、また、「宜春抄」が、「草村の螢は、遠く真木の嶋のかがり火にまがひ」を注して、「或抄」の説に反駁をくわえつつ、

「真木の嶋に、ほたる・かかり火、読る歌あるか、猶可尋。」

（『宜春抄』三六七頁）

というのは、「歌」を「尋ね」ようとする姿勢にあきらかなように、典拠としての和歌表現が、散文表現の根底にはたらくちからをあかそうとするものにほかならない。

『方丈記』本文の発想の源泉を「歌」に見ようとすると、考証態度によって引証される、それら典拠の指摘のかずかすは、『方丈記』という文章が生まれてくる場所についての関心によっている。『方丈記』の文体の秘密をあかそうという意志・熱意が、典拠の博搜に駆りたてるのである。そのようにして指摘されたものは、

○「爰の文段は、山家集に寄藤述懐を西行上人 西を待心に藤をかけてこそその紫の雲をおもへめと待るをおもへへて書れたりと見ゆ」（『流水抄』二七二頁）。

○「ここの心詞に通ずる歌山家集に なかれゆく水に玉なす

うたかたのあはれはかなき此世也けり」（『宜春抄』三〇五頁）

○「堀河院初度百首俊頼歌に 朝かほのはなのすかたを見つるより暮を待へきこ、ちこそせね ここは此歌なとのこ、ろにてかける成へし。」（『宜春抄』三〇八頁）

のように、おおく、『方丈記』の文章の発想の源としての歌々なのであつた。

そうしたうごきのなかに、たとえば西行の和歌が『方丈記』の文章の源泉をになうひとつの顕著な傾向としてとくに指摘されるようになると、影響関係は、表現の背景に潜む「先達」の人生にまでおよんだ洞察としてしめさることもなる。たとえば『宜春抄』は、つぎのように述べる。

○「西行与長明為同時代人。されとも西行は此書（『方丈記』）を書し時より二十三年以前に寂しぬ。先達の歌なれば長明これを思ひいててこの文にとりかけるときこえたり。是より奥にも上人の歌をもてかけるとみゆるところあり。西行の歌長明したひたるゆへ成へし。」（『宜春抄』三二八頁）

○「終始上人（西行上人）の歌にてかけりとみゆる文章おほし。」（『同』三七八頁）

おそらく『宜春抄』には、『方丈記』の表現にかかわつた西行歌の歌ことばの影響のみがみられているのではない。「先達の歌なれば」と書くところに、むしろ、西行上人という「先達」が、たんに「歌の先達」としてばかりではなく、「隠」を生きた「先達」であつたという洞察がしめされているようにすらおもわれる。いわば西行Vという現象が、『方丈記』の一有力典拠とみなされるにいたつたのである。これが、近世注釈書がもつた水準である。

*

典拠の指摘という行為の根幹には、注釈・考証という、義を解

く方法についての自覚的な意識がある。王朝末期の文学表現が、古典主義を標榜するものであったからにはかならない。それが、典拠研究を必然とする理由でもあった。典拠研究には、『方丈記』の本文をひとたび王朝和歌の世界にさしもどし、ふたたび『方丈記』の本文にたちもどつて表現の重層性をわれわれに知らしめることが意図されている。

明治以後、現代にいたる諸注釈書が、積極的に典拠を追加しつづけるのも、おなじ理由によるだろう。「歌語や和歌的発想」にかわる典拠の博捜は、『方丈記』に長明の歌人的特質がそのままながれこむ相貌をかいまみせてくれる点において、また、『方丈記』の文体の特質が「和文脈的表現」を基盤に成立している事情を究明する手がかりをあたえつづけてくれている点において、まことに有効な言説群を構成してきたのであった。

だが、ともすれば、それら有効性に満ちあふれた言説群が、『方丈記』の文章のもうひとつの側面を気づかれにくくしてはこなかったか。典拠研究の隆盛が、『方丈記』における典拠からの離反ないし逸脱という方向性を隠蔽するようにはたらいでしまつたとしても、問題ではないだろうか。いま一度たちどまつて考えてみるべきは、和歌表現の受容と継承というその反面における、離反と訣別の相である。離反と訣別の相を先行文学表現の受容と変容のなかにふくめてとらえかえす視点がわすれられてはなるまい。

歌語や和歌的発想におおくを負う『方丈記』の、王朝伝統言語からの離反、逸脱こそが、問題である。王朝伝統言語を踏まえ、『方丈記』の文章は、どこへ行き着こうとしたらう。

3 「かむな」と「みさご」

たとえば、『方丈記』が取り込んだ「かむな」と「みさご」の譬喩表現は、その問題を考える具体的ななてがかりを提供してくれている。

「六十の露消えがたに及びて」むすんだ「末葉の宿り」について語った場面、『方丈記』は、「末葉の宿り」に住む「われ」を、「かむな」「みさご」に關係づけて、つぎのようになてしたのである。

「たゞ、仮の庵のみ長閑けくして、恐れなし。ほど狭しといへども、夜臥す床あり、昼居る座あり。一身をやどすに不足なし。かむなは、小さき貝をこのむ。これ事知れるによりてなり。みさごは、荒磯に居る。すなはち人を恐る、が故なり。われ、また、かくのごとし。」

「われ、また、かくのごとし」とは、「仮の庵」に住む「われ」が、「小さき貝」を家とする「かむな」に似ており、「荒磯」にいる「みさご」とおなじである、ということである。

このような譬喩關係が成立するためには、住む家、住む場所についての類似性が認識される必要がある。むしろ、われわれは、この直喩では、喩するものと喩されるものとのあいだに、容易に類似關係をみいだす。類似關係があまりに明白であるため、これを読む者は、「かむなのよさうなわれ」、「みさごのよさうなわれ」ということを、事態としてただちに了解してしまふ。「かんな」という貝や「みさご」という鳥のすがたが、どう見ても、人間のすがたに類似してはいないにもかかわらず。

つまり、われわれは、この直喩における類似關係が、家の「小

「かさ」および「人里離れた」という住まいの形態的な側面にあることを了解し、しかも、「事知れる」、「人を恐るゝ」という内面的な理由にまで及んで類似性がもたれていることを了解するのである。

だが、この『方丈記』の喩が、内面的な理由をふくんでの類似性の了解を強要してくることに、注意すべきではあるまいか。

「かむな」が「小さき貝を好む」のは、ほんとうに「事知れるによりて」なのか。また、「みさご」が「荒磯にゐる」のは、ほんとうに「人を恐るゝ、がゆゑ」なのか。

「われ、また、かくのごとし」とは、そのように「事知れるにより」「人を恐るゝ、がゆゑ」として提示された内面的な理由が、ほんとうにそのようなものとして一般共通理解において了解されているところには成立しないはずである。喩の通常のありかたでは、喩するものが含意する属性の一般的な了解性において、譬喩関係は、成立する。この直喩では、「事を知る・かむな」、「人を恐れる・みさご」ということが、たれにも自明であること、それが了解の前提である。だが、それはほんとうに自明のことならぬのであるか。

『方丈記』と同時代の文章に、そのような了解をみいだすことは、困難である。みるかぎり、これは、『方丈記』に独自の表現なのである。

あるいはこれは、「歌語や和歌的発想を積極的に利用」した「和文脈的表現」を特徴とする『方丈記』が、王朝伝統の表現世界をうけついでたものであったらうか。そこで、王朝人が、「かむな」「みさご」を『方丈記』のような喩の文脈に登場させ、おなじような譬喩関係を構成しうることはとして自明のうちにあつたことがあつたかどうか、検証してみよう。

*

「かむな」「みさご」の王朝人における用法の一端は、江戸期の注釈書がすでに指摘している。まず諸注釈における発言をながめてみる。

* 「かむな（ごうな）」

○ 懈蟻小貝と書り伊勢国より来るじじかひの事なり（『詞説』一〇〇頁）

○ 寄居虫と書けり形ハいなごに似たり／＼小児の疳の治する也己が身のほどをりして（知りてカ）ゑがいもちいさをこのむとなり（『診解』二二八頁）

○ 寄居虫と書り。枕双紙に日比ハがうなのやうに人の家にしりをさし入てなんさふらふ云々本草綱目四十六云形似蜘蛛入螺殻中負殻而走触之則縮如螺云々（『流水抄』二八一頁）

○ もとより見^レ小方丈をたのしむ長明かころより人のころろつきなき小虫のうへまで目の及ふところなり。寄居虫と書てかうなと訓す。伊勢国にてはししかいといふ。（『宜春抄』三七二頁）

* 「みさご」

○ 詩関々雉鳩在河之洲（『詞説』一〇〇頁）

○ 関雉とかけり詩経云関々雉鳩在河之洲云々人をおそれてはなれ鳴にすむものなり（『診解』二二八頁）

○ 鶉、魚鷹。雉鳩など書り。鶉の字を用ハ俗の謬也。万葉第三に みさこ居る荒磯に生るなのりその。同十一 みさこ居る沖のあら磯による浪のなど。其外の古歌に多し。爾雅注曰鶉鶉類也。好在江辺山中亦食魚者云々なを本草綱目山禽部に詳

也（『流水抄』二二八頁）

○雖鳩また鶴をもみさごこと訓す。字書をみれば雖鳩与鶴相似形色。うたにはみさごゐるあらいそなと、よむ。是は水砂の義にゐるといひかけたる古歌に　みさごゐるすにをる船のゆふ垣を待らんよりはわれこそまされ　詩経云関々雖鳩在河之淵といふことをすにをる舟とよみたるにや。（『宜春抄』三七頁）

江戸期注釈書は、みぎにみるとおり、いくつかのふり用例をあげる。それらは、字義を解く、漢籍の典故をあげる、万葉歌を指摘する。だが、譬喩関係にたいに照準をあわせて説くものはひとつもない。

これらは、『方丈記』が「われ」を「かむな」や「みさご」に係づけて展開していることに注目しないし、それを考えようともしない。『諺解』が、「みさご」を注して「人をおそれてはなれ嶋にすむものなり」というのは、『方丈記』の本文によつたにすぎないだろう。ただわずかに、『宜春抄』が、「もとより見小方丈をたのしむ長明がころより、人のころつなき小虫のうへまで目の及ぶところなり。」というのが、「方丈」と「小虫」を関係づけている点で注目されるにすぎない。

現代の注釈書でも、動物学的見地からの注をほどこし、和歌の典故のいくつかを追加するにすぎない。現行諸注も、喩の文脈において展開する「かむな」「みさご」の意味について言及しえていない点において、旧注の範囲を越えるものではない。

4 意味を賦与する

王朝人が、「かむな」「みさご」を、『方丈記』のような喩の文脈に登場させ、おなじような譬喩関係を構成しうることはとして自明のうちにあつたかどうかが、あらためて検討する。「かむな（寄居虫）」は、八代集歌語ではない。新奇をほこる俊頼「散木集」にも見いだせない。「やどかり」という異名においてうたわれることもない。「かむな」は、王朝和歌の世界の主要語彙には属さなかつたとしられる。

わずかに、『山家集』が、

海士人のいそしく帰るひしきものはこにし蛤がうなしただみ

（山家集・一三八〇）

とうたつてはいる。だが、これも、地方でのめづらかな詠出素材として見いだされたのであつた。

王朝期の散文では、すでに江戸期注釈書が指摘している『枕草子』の例、

がうなのやうに人の家に尻をさし入れてのみさぶらふ（三卷本系枕草子・三三四段「僧都の御乳母のままなど」）

を知るばかりである。『枕草子』が「がうなのやうに」という直喩でしめしているものは、「宿を借る」という習性的側面についての理解である。そして、それ以上の内容に言及しようとするのは、王朝人にとつての「かむな（がうな）」が、他の貝に身を寄せるといふ生態的な習性の面だけで理解されていたことを証している。生態的な習性面での理解のみが、王朝人の共通理解であつたらしい。

「かむな」が他の貝に身を寄せるという生態は、王朝人にも判然としていたが（たとえば『枕草子』）、「事知れるによりて」という理由で他の貝に身を寄せるというのは、王朝人の共通知識ではなかったとされる。すくなくとも、「事知れるによりて」という理由そのものによってクローズアップされるべき生き物ではなかった。

すると、「かむな（寄居虫）」が「事知れるによりて」という理由で他の貝に身を寄せるというのは、『方丈記』が発見した喩の意味内容だったというべきなのではあるまいか。

それは、王朝人の感受性の世界から離れた、『方丈記』による独自の意味賦与であったとかんがえるほかない。「かむな」と「われ」とのあいだの類似性が、『方丈記』の発見的認識においてとりむすばれているところに、この直喩表現のもっている意味があるといえよう。

*

「みさご」の場合を、見てみよう。

諸注がかならず参照をうながすように、「みさご」はすではやく『萬葉』にうたわれている。『萬葉集』の「みさご」の用例は、すべて六首、「みさごゝゐる・荒磯」という類型表現においてうたわれることを常套とする。類型表現において歌われるのが、萬葉歌の「みさご」の特徴であった。すなわち、

○みさご居る磯廻に生ふるなのりその名は告らしてよ親は知るとも（3—352）

○みさご居る荒磯に生ふるなのりそのよし名は告らせ親は知るとも（3—353）

○みさご居る沖つ荒磯に寄する波ゆくへも知らず我が恋ふらくは（11—2739）

○みさご居る洲に居る舟の夕潮を待つらむよりは我こそまされ（11—2831）

○みさご居る荒磯に生ふるなのりそのよし名は告らじ親は知るとも（12—3077）

○みさご居る洲に居る舟の漕ぎ出なばうら恋しけむ後は逢ひぬとも（12—3203）

「みさごゝゐる・荒磯」という結合は、本来的には、「みさご」の生息環境の観察によってもたらされたものであったろう。だが、みぎに例示したように、序詞的用法に統一される萬葉の「みさご」は、もはや固定的な観念連合が確立して、それを「みさご」の（本意）とする段階にまで表現レベルがすすんでいたことをしめしている。

この類型表現「みさごゝゐる・荒磯」は、根底に「みさご」をめぐる共同の観念をもって成立している。しかも、すべて「恋歌」として詠まれるところに、歌語「みさご」についての「本意」がになわせられているようにおもわれる。

「みさごゝゐる・荒磯」が、すべて「恋歌」としての修辭的役割をはたしうるのは、中国古典における「男女の結合の象徴」という「みさご」の含意性によるだろう。その「みさご」が、「荒磯・洲」という場所性の喚起するイメージに結合して、「みさごゝゐる・荒磯」は、序詞的用法としての安定をみたのである。これが萬葉歌のレベルにおける「みさご／荒磯」という結合の内実であった。

万葉人には、「みさご」はすでに「荒磯にゐる」のであった。なぜ、そうなのか、と理智的に問うことは、万葉人の関知するところではない。万葉人には、「荒磯ゝゐる・みさご」の表現価値が問題なのであり、それは、「恋の鳥」という暗喩にささえられ、その面にしばられて機能することで十分だったのだとおもえる。

ここからは、「みさご」が、なぜ、「荒磯にゐる」のかといった問題は発生しないし、「みさご」が「荒磯にゐる」理由についての情報もたらされることも、ない。

では、平安時代和歌ではどうか。

平安時代和歌でも、「みさご／＼荒磯」という修辭的な連合は強固である。そしてここでも、「みさご」がなぜ「荒磯にゐる」のか、その理由についてふれるものは、ない。

○みさごゐる磯間に生ふる松の根のせはしく見ゆる世にもあるかな（堀河百首 松 1300、また散木集1250）

○ゆふまぐれ鷹と見ればあら磯の波間をわくるみさごなりけり（散木集51）

○荒磯の浪にそなれてはふ松はみさごのゐるぞたよりなりける（山家集1000）

「みさご・荒磯」という連合が、修辭のうゑに生き延びているのがわかる。『散木集』は、このほかにも二百ばかり「みさご」をうたうが、いずれも「磯」を呼びこまずにはすまなかつた（『散木集』一〇二番、一一四〇番）。

平安時代和歌では、「みさご・荒磯」が「恋歌」以外の歌にもうたわれるようになった点に、万葉歌にことなるあたらしみをもとめうるだろう。だが、それも、万葉人のもつていた「みさご＝恋の鳥」という暗喩的側面を欠落することで果たされている。王朝和歌の世界での「みさご」は、『萬葉』以来のうたいぶりを修辭の上でのみ継承したといわねばならない。そして、平安和歌は、その修辭にかかわる面でのみ自足了。平安和歌もまた、「みさご」がなぜ「荒磯にゐる」のかについて、関心をしめすことはなかつたのである。

王朝和歌世界の周辺では、どうなっているだろうか。

和歌的世界に隣接しながらも、和歌のみやびからは距離をもつた「今様」に、「みさご」についての王朝貴族和歌周辺の事情をうかがえば、たとえば『梁塵秘抄』には、つぎのようにある。

「海にをかしたき歌枕 磯辺の松原琴を弾き 調めつつ 沖の波は磯に来て鼓打てば 雉鳩浜千鳥舞ひ傾（こだ）れて遊ぶなり」（『梁塵秘抄』四〇〇番）

「雉鳩、浜千鳥」が、「舞ひ傾（こだ）れて遊ぶ」という表現は「新鮮」である、と評されるこの歌謡において、「新鮮」さは、和歌の世界から離れたところにみいだされている。だが、その新鮮な表現をもつ「今様」も、「みさご／＼磯」の類型を修辭上のこととして引き継ぐばかりである点は、王朝和歌世界にかわらない。

ようするに、平安和歌における「みさご」は、『倭名抄』が「爾雅集注中云、雉鳩（割注 略） 鷓屬也、好江邊山中亦食魚者也」と注した理解^{（考）}を越えて理解されることはなかつたようなのである。

すると、「荒磯」にゐる「みさご」が、へなせ^{（考）}荒磯にゐるのか、という理由について、『方丈記』が、「人をおそる、ゆゑなり」と明確に自明のごとくに述べるのは、かならずしも王朝人の常識に属するような自明性をもつて提出されたものではなかつたと、あらためてしられる。それは、「かむな」の場合と同じように、和歌世界の共有知識を越えた解釈が『方丈記』においてほどこされたのであり、『方丈記』が発見した譬喩関係の内容だつたというべきなのである。

ここでも、「みさご」と「われ」とのあいだの類似性は、『方丈記』の発見的認識としてそのような意味賦与行為においてとりむすばれている。そこに、この直喩表現のもつている意味があると、いわねばならない。

すると大切なことは、『方丈記』における「みさご」についての意味賦与とは、つまるところ、王朝和歌世界が共有してきた知識を、超脱ないし逸脱しようとするものではあるまいか、という視点である。『方丈記』は、歌語をもちいながら歌語の領域を超えようとし、王朝的共通理解の範囲内の題材をもちいながらその範囲を超えようとする意志をひそめ、実行した散文なのであったといえよう。

なお、王朝散文の世界では、「みさご」は、おもいのほか、人に身ぢかな存在でもあったらしい。『宇津保物語』「初秋」には、邸内の池の中島のみさごを弓で射止める場面がえがかれている（中島なる五葉に、鶉、池より立ちて、三寸ばかりの鮒をくひて居りけるを）。時代をくだれば、『太平記』卷十六「本間孫四郎遠矢事」には、「和田の御崎の波打際」から「小松陰」に馬を打寄て、浪の上なる鶉」を弓で射止める場面がえがかれる。

『方丈記』の理解は、どうやら『方丈記』に特有のものであったらしい。

5 転倒する喩

「かむな／みさご」が、「事を知り／人をおそるゝ」ようにして生息しているという見方（認識）は、『方丈記』に独自のであった。この『方丈記』の発見的認識は、『方丈記』という文体の成立過程を考えるうえで、ある種のヒントをもたらしてくれているようにおもふ。

問題の文章を、いま一度かかけておこう。

「かむなは、小さき貝をこのむ。これ事知れるによりてなり。

みさごは、荒磯に居る。すなはち人を恐るゝが故なり。われ、また、かくのごとし。」

「われ、また、かくのごとし」という喩が意味するものは、「われ」が「かむな／みさご」のように「事を知り／人を恐るゝ」ということだ。だが、「事を知り／人を恐るゝ」という内容は、『方丈記』が「かんな／みさご」に賦与した意味であった。『方丈記』は、「かんな／みさご」の外的な生態の側面に、内面的な意味をあたえることによって、類似関係の緊密性をあらたに築こうとしたのである。われわれ読者は、表現されたものにおける類似関係の緊密性をみだし、表現に即してそれを了解しようとする。

注意すべきは、ここには、喩における「転倒」という事態が生じていることだ。直喩表現における、「譬喩するもの」と「譬喩されるもの」との関係が、ここでは「転倒」されている。修辞上はあくまでも「われは・かむな／みさご・のごとし」なのだが、ここに、検討してきたような『方丈記』の意味賦与（発見的認識）という行為を介在させると、この直喩が表現しているものは、逆に、「かむな／みさごは、われのごとし」なのであったといえべきなのである。

佐藤信夫「レトリック感覚」に、直喩の理解ということについて、興味ぶかい指摘がある。佐藤は、鷗外からの直喩の例を引きつつ、つぎのように述べている。

「さあ、ずつとお這入なさいよ。檀那はさばけた方だから、遠慮なんぞなさらなないが好い。」
 轡虫の鳴くやうな調子でかう云ふのは、世話をしてくれた、例の婆さんである。（森鷗外「雁」）

「XはYのようだ」という形式であらわされる直喩において、ここでは、「例の婆さんの声」が「轡虫の鳴くやうな調子」にたと

えられている。佐藤は、「その虫（＝譬虫）の名まえさえ知らなかつた読者がかりにいたとしても、なお、その人は鷗外の直喩を正しく理解するに相違ない」という。佐藤の指摘は、つぎのとおりである。

「譬虫の鳴くやうな」調子でしゃべった人物が、金持ちに妾のとりもちをして小づかいをかせこうという婆さんであることを、その小説をそこまで読んできた読者は承知している。でしゃばりで、ごますりで、厚顔な、かなり下品なばあだろう……ぐらいの察しはついている。そこで、その読者はこの直喩から、逆に、くつわ虫という虫はよほど下品な声で鳴くらしい……と推定する結果になる。何のことはない。Yによく似たXを知るかわりに、Xによく似たYをさとする……というあべこべの直喩をそこに読み取ってしまうのだ。その読み方は、作者の意図とは逆である。」¹⁵

佐藤のこの発言は、表現と理解の關係の微妙な領域にふみこんで、すぐれた見方となっている。「直喩を逆向きに読む」ことで成立する理解領域が指摘されているからだ。さらに佐藤が、

「駒子の唇は美しい蛭の輪のやうに滑らかであつた。」（川端康成『雪国』）

を引例して、結論的に

「類似性にもとづいて直喩が成立するのではなく、逆に、直喩によって類似性が成立する」のだと、言いかえてみたい。

「美しい蛭のような唇」という直喩によってヒルとくちびるとは互いに似ているのだという見かたが、著者から読者へ要求されるのである。」¹⁶

と述べているのも、「あべこべの直喩」を考えるうえで参考になろう。

佐藤の「あべこべの直喩」という考え方が参照されているのは、『方丈記』の問題の文章にたちかえってみるとき、そこでも、似たことがおこっていると判断されるからである。

じつのところ、「われ、また、かくのごとし」とは、「事を知り／人を恐るる」という「予」の現在が、「一身を宿す」べき「仮の庵」のありようを「かむな／みさご」の生側の内側の内面的意味にまでおよんで譬喩關係を成立させ、そのことが逆に「かむな／みさご」を喩の文脈に拉致してきたと考えるべきなのである。それは、「人の世」を「恐れ」て山中に隠れ住んだ「予」じしんの現在が、「かむな／みさご」にあたえた内容であることよって成立している喩だといわねばならない。意味賦与による類似性の緊密さを構築し、そのよって形成された類似性を、われわれ読者に強要しているのが、ここでの表現方法なのであるといつてよいだろう。だから、「われ、また、かくのごとし」ではなく、「かむな（みさご）、また、われのごとし」というのが、ここでの表現の裏側にあるほんとうのことがらなのである。「かむな（みさご）／のようなわれ」という直喩は、直喩によって類似性が成立する」というレトリックのなかに、じつは逆に「われのような／かな（みさご）」という実体を隠蔽していたといふべきなのである。

江戸期の注釈も現代の注釈も、そのことをみすこしにしてきたようにおもわれる。草庵の閑居生活という事象を説明するために既存の喩が使用されたのではなく、逆に、その事態を説明するためにあたらしく発明されたのが、この喩だとみるのがたまたましいだらう。

『方丈記』は「われ」と「みさご」のあいだの類似關係の緊密さを意味賦与行為のなかに築きあげ、通常の直喩におけるレトリックの逆の過程を成立させて自己の文章を編成したのであつ

た。それが、ここでの『方丈記』の文章の成果である。それは、歌語をもちいながら歌語の領域を超えようとし、王朝的共通理解の範囲内の題材をもちいながらその範囲を超えようとした『方丈記』の文章が、さらにおのずからに、転倒する譬喩という表現法によって、王朝伝統言語の超脱・逸脱をはかっていたことをあかしているようにおもわれる。

なお、「みさご」の暗喩として存した男女結合の象徴という理解は、『方丈記』には、無縁であった。⁽¹⁷⁾

*

以上の検討によって、「かむな／みさご」という単語レベルでの出典は、ある、だが、『方丈記』のここでの本文にふさわしい典拠はない、というべきである。

けれども、ふさわしい典拠をもたない、ということ結論にしないでおけば、『方丈記』の典拠論にとって大切なことは、表現のありようについての理解のしかたである。『方丈記』の文章とは、歌語の伝統をにないつつ、和歌の世界からのずらしにおいて、そのような表現をもちえたのだ、という具合に考えてみる事が、『方丈記』の典拠論にとって生産的なありかたではないだろうか。

6 踏まえ、かつ、ずらす

以上の検討は、『方丈記』が王朝の伝統的表現世界を引用するのは、王朝伝統言語を踏まえ、かつ、ずらす、という手法においてそのなのであった、という事情を示唆しているようにおもわれる。類する証拠を、いくつかあげてこのことを確認してみよう。

たとえば、『方丈記』が四季の景物を題材にとりあげて一文をな

した箇所は、つぎのとおりである。

「春は、藤波を見る。紫雲のごとくして西方に匂ふ。夏は、郭公を聞く。語らふごとに死出の山路をちぎる。秋は、蜩の声耳に満り。空蟬の世をかなしむ楽と聞こゆ。冬は、雪をあらはれぶ。積もり消ゆるさま罪障にたとへつべし。」

『池亭記』に依拠して書かれた一節である。『池亭記』が「漢詩的自然観の中から景観をとらえ」ているのに対し、『方丈記』は「和歌的な世界で多く取り上げられる題材を軸にしたもので、表現も和語、歌語を中心に組み立てられようとしている」と指摘される箇所である。

たしかに、四季の順に整序して記述されるこの筆法は、一瞬、四季の景物が四季の代表的な景物としてとりあげられているような錯覚にわれわれをおちいらせる。

だが、「春」の「藤波」、「秋」の「蜩」、あるいは「夏」の「郭公」、「冬」の「雪」は、おのおの、四季の代表的景物としてとりあげられているだろうか、と問うとき、和歌世界での題材を利用し、和語、歌語によって組み立てられたこの箇所が、和歌世界での代表的な見方からのずらしにおいて成立している点に注意されることになる。

四季の景物の代表格たる「春の花」「秋の月」が、『方丈記』のこの箇所ではまず黙殺ないし排除されている。「春の花のあした、秋の月の夜ごと」（古今集・序、また千載集・序）という成句的な使用態をなすこと「花」「月」を、『方丈記』はえらばなかった。なるほど「藤」「蜩」は、勅撰集の「春」「秋」部の歌材ではある。しかし、それがかならずしも中心的な季材ではないことは、勅撰集にとりあげられる分量の僅少に徴してあきらかである。

「郭公」「雪」は、夏、冬を代表する季材ではあるだろう。だが、

「雪」を「罪障」に関連づけてうたう歌は、八代集にはわずかに『拾遺集』の一首（年のうちに積もれる罪はかきくらし降る白雪とともに消えなん・拾遺集・冬・二五八）をみるのみで、「雪歌」の代表的なあり方ではない。

おなじように、「死出の山路をちぎる郭公」を「夏」の季材としてうたうことは、八代集の伝統にはない。「郭公」が「死出の山」と関係づけられるとき、勅撰集は、四季部ではなく、「哀傷」や「雑」の部に配列するのである（たとえば、拾遺集・哀傷・一三〇七、金葉集・雑下・六四五、千載集・哀傷・五八二）。むろん、ここには、西行の

ほととぎすなくなくこそは語らはめ死出の山路に君しかからば（山家集・中・七五一）

という歌がおもいうかべられてはいるだろう。だが、この哀傷歌における「ほととぎす」も、もちろん四季の景物としてのそれではない。

「歌語」という観点だけからみれば、『方丈記』のこの文章は、たしかに和歌世界の題材によりかかっている。だが、『方丈記』は、四季の景物をとりあげているようにみえながら、ちがう基準によってこの文章を編成しているのである。『方丈記』が選択した基準は、ひとくちに言ってしまうと、仏教的な観点によるだろう。

『方丈記』がここでとりだした四季の景物は、四季に重点をおくのではない。それは、『方丈記』の論理にふさわしい景物として選択され、意味づけられて提示されようとするのである。

それはもはや、王朝歌ことばの世界が季節の移りに応じて配置した景物たちと、おなじものではない。それら選びなおして提示された景物たちは、四季の景物としての「藤」や「ほととぎす」や「ひぐらし」や「雪」から、『方丈記』の風景を構成する題材へ

と変質している。

秋の「ひぐらし」の声が「楽」に聞きなされることが、中国文学での伝統にもとづくものであったにしても、「空蟬の世をかなしむ」という意味賦与は、『方丈記』に独自のものであった。『萬葉』以来の和歌の伝統でも、「ひぐらし」はおおく詠まれる。しかし、「ひぐらし」をこの世の無常に結んでうたうことはなかった。長明じしんにしても、かれが歌の世界で「ひぐらし」をうたえば、歌の表現は、歌世界の伝統にしたがうのである。「何も踏まえな」とは信じがたい」というこの箇所は、踏まえて、かつ、ずらす、という手法によって書かれているといわねばならない。

『方丈記』は、『方丈記』の論理に即して、和歌世界の題材をあらたに選びなおして提示する。これらは、仏教的観点から賦与された意味の統一をうけて、四季の移りのなかの景物の意味を、和歌的世界の観賞からずらしてみせているというべきだろう。『方丈記抄』がこの部分を注して、「みるものごとに、無常をかんじける事、殊勝なり」（注5 掲出書・一四九頁）というのは、踏まえ、かつ、ずらす、という手法を見抜いた評言であるごとく、まことに的確な批評であった。

7 花は愛で、根は食べる

和歌のとりあげる四季の景物が、おおく〈愛で〉の世界の構築に関係するとすれば、『方丈記』のとりあげる四季の景物は、おおく〈食〉の世界に関係する。いわば、花は愛で、根は食べるのである。『方丈記』は、和歌世界の題材をも、〈生活〉の場に関連づけ、「独善の計」の充実のためにこそ取り上げているかに見える。

これもまた、『方丈記』がもつた和歌的世界からのズラシにおいて成立する表現世界ではなかつたらうか。『方丈記』の論理には、仏教レベルからの視線とともに、へ生活レベルからの眺めわたしがあ

るといえば、日野外山の「ふもと」に住む「小童」を「友として遊行」しつつ、「或は茅花をぬき、岩梨をとり、零余子をもち、芹をつむ。」とある一文。これは、「食用となる植物」に焦点をあてたものであった。それは、歌語としての「せり」「つばな」を、「岩梨」や「零余子」など生活的なへ食の世界と同列におく所為である。また、「夜の床」に供せられた「わらびのほどろ」は、春の到来とともにあつた和歌世界の「早蕨」の伝統からは異質である。

さらにまた、和歌の表現世界にずいぶんちかいと見えるつぎのような箇所、

「帰るさには、折りにつけつつ、桜を狩り、紅葉を求め、蕨を折り、木の実を拾ひて、かつは仏に奉り、かつは家づととす。」

も、よく見れば、和歌世界そのままではない。たしかにこの一文の背景には、

○見てのみや人にかたらむ桜花手ごとと折りて家づとにせむ
(古今・春上・五五)

○折らずとて散らでも果てじ桜花この一枝は家づとにせむ
(林葉・一一四)

○おのづから家づとにこそなりにけれ道のたよりに折れる早蕨
(林葉・一八一)

などの歌世界のことばが沈んでいるだろう。だが、『方丈記』は、「かつは仏に奉り」という一句を挿入することによって、歌世界の観賞的題材を方丈庵のへ生活の題材に変更することを忘れる

しないのである。

8 「仮名文の対句」

もうひとつ、「古歌や古詩の表現をふまえ、『方丈記』の中でも屈指の美文的箇所」とされるつぎの一節は、検討を省略するわけにはゆかない。

「若し夜しづかなれば、①窓の月に故人をしひのび、②猿の声に袖をうるほす。③くさむらの螢は、遠く槇のかぐり火にまがひ、④暁の雨は、おのづから木の葉吹く嵐に似たり。⑤山鳥のほろとなくを聞きても、父か母かと疑ひ、⑥峰のかせぎの近くなれたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。或は又、⑦埋み火をかきおこして、老のねぎめの友とす。⑧恐ろしき山ならねば、ふくろふの声をあはれむ……」

旧注以来の指摘によれば、この一節には、和漢朗詠集(①②)、堀河百首(③⑦)、後拾遺集(④)、伝行基歌(⑤)、山家集(⑥⑧)、などの典故が見いだされ、さらには、伊勢物語(③)、源氏物語(③⑧)を踏まえるだろうことがあかされている。そのことだけを考へれば、『方丈記』は、王朝言語の表現世界から一步も抜けていないかに見える。

しかし、ここにも、王朝伝統言語をずらそうとする貌つきがみえる。浅見和彦が、

「本来的にはあまり対句にはなじまないと思われる和語を、長明はあえて対句に仕立てあげ、和文の新しい表現を獲得しようとしたのではないか」

と述べたのは、まさにこの一節を対象にしていることであつた。

「仮名文の対句」による「和文の新しい表現」。それは、この美文構成の一節が、王朝伝統言語からのずらしをこころみようとすると一節であったことを証している。「仮名文の対句」という文体実験の意志につらぬかれて、この一節は、「和文」の伝統をずらすのである。

「和文の新しい表現を獲得しようとした」とは、『方丈記』の「仮名文の対句」が、和語・歌語・和歌的発想を受容しつつ、自己の散文を、それまでの和文の王朝伝統言語がこころみようとはしなかつた領域にずらすことにおいて成立することを意味するだろう。

かくて、受容しつつ逸脱する、その微妙なバランスのなかに『方丈記』における王朝伝統言語にかかわる態度があった。ズラシが成立するためには、必然的にずらすべき先行与件をもたねばならない。『方丈記』にとって、王朝伝統言語とは、自身の文体を成立させるための、ずらすべき先行与件としてあったのである。

9 『方丈記』へ

『方丈記』が「中世的」と評しうる文体価値をもつとしたら、それは、王朝伝統言語（それは和歌表現に代表される）の思考・発想からの離反・逸脱をこころみようとする『方丈記』の相貌のなかにこそ、見いだされねばなるまい。『方丈記』とは、表現の個々の部分に典拠をすえ、すえた典拠からの逸脱をはかることによって伝統言語を超えようとする記述の過程そのものであった。

修辞の表層レベルにおける『方丈記』の引歌表現（歌語、和歌的発想の受容）を過大に評価するあまり、『方丈記』の文体の成立

を、伝統的な宮廷文学の延長線上での成果のみに帰してしまうならば、散文としての『方丈記』における文体上のこころみがあった意味までには、ついに手がとどくことがない。われわれがみなければならぬのは、「和文脈的表現」を豊富にとりこむとみえる『方丈記』の文体に、王朝歌ことばを踏まえ、かつ、ずらす、という手法、すなわち、かえって、（歌のわかれ）こそが実践されていたのではあるまいか、という事情である。

『方丈記』という散文の成立には、歌ことばからの離別の意志において果たされようとする表現営為があった。修辞の表層レベルでの和歌的表現の受容、そして、意味レベルでの和歌的世界なるものからの離反・逸脱。それこそが、漢文の文章スタイルとしての「記」文体を、「仮名文の対句」によるあらたな文体として成立させようとした『方丈記』の苦闘であった。『方丈記』とは、王朝伝統言語の世界を受け継ぎつつ、そこからの逸脱をこころみることにおいて成立し、成功したまれな例としての「中世的」な散文なのである。

注

- (1) 『方丈記』における『池亭記』の模倣と変奏については、拙稿『方丈記』論―『池亭記』取りを軸として―（『國語國文』第六一卷 二号・平成四・二）を参照願う。
- (2) 浅見和彦「方丈記の文体―作品論への手掛かりとして―」（『文学』一九八四・五）。
- (3) 稲田利徳「『方丈記』の文体―歌語的措辞の融解―」（『解釈と鑑賞』一九九四・五）。

- (4) たとえば、「よとミ(淀み)」を注して『古今集』の「滝つせの中にも淀ハ有てふをなど我恋のふちせともなき」を引く例(『首書』四一頁)は、本文注としてほとんど有効ではない。あるいはまた、「かなしみあひ侍りしこそあはれにかなしく見侍りしか」を注して、「こゝのしかはすみてよむへし。こそしかとうけたるてにはなり。」と述べ、「拾遺集恋一卷頭歌に恋すてふわか名はまたきたちにけりひとしれずこそおもひそめしか」以下、後拾遺集歌、金葉集歌を引く例(『宜春抄』三四一頁、など)。
- (5) 以下にもちいる江戸期注釈書は、すべて築瀬一雄編『方丈記諸注集成』豊島書房により、書名は、つぎのように略称する。『首書方丈記』↓『首書』、『方丈記詞説』↓『詞説』、『長明方丈記抄』↓『方丈記抄』、『方丈記診解』↓『診解』、『方丈記流水抄』↓『流水抄』、『方丈記宜春抄』↓『宜春抄』。
- (6) この「或抄」は、「喜撰が歌」をあげて注する「詞説」のことであらう。ただし、『詞説』通りの文言ではない。
- (7) 定家のいわゆる「ことばはふるく、こころはあたらしく」は、新古今時代の古典主義の空気を象徴する。歌人の経歴をもつ長明の文学に、典拠としての和歌を探索する行為は、きわめて自然であるといえる。
- (8) 本文の引用は、佐竹昭広校注『方丈記』岩波・新古典文学大系による。なお、カタカナをひらかなに直し、「睚」を「みさこ」と表記した。
- (9) 築瀬一雄『方丈記全注釈』に「……動物学の分類では、節足動物の甲殻綱軟甲亜綱十脚目異尾類ヤドカリ科ということになり、その種類は非常に多い。体の成長につれて、小さい貝からだんだんと大きな貝に移ると言われている」(二三八頁)とある。「小さい貝からだんだんと大きな貝に移る」という注は、ここではどのような意味をもつだろうか。
- (10) 安良岡康作『方丈記全訳注』講談社学術文庫 一八八頁。
- (11) 新潮古典集成『山家集』頭注に「淡路か紀伊」という(三九〇頁)。
- (12) 『詩経』第一「閔雉」の、「閔々雉鳩有河之洲、窈窕淑女君子好逑」における「雉鳩」のイメージは、「和諧」にある(毛伝)。また、朱子集伝でも「閔閔然之雉鳩、則相興和鳴於河之洲之上矣」と称される(富山房『漢文大系 第一二卷 毛詩』四頁)。学習研究社版『中国の古典 18 詩経 上』は、「雉鳩」が「男女の結合の象徴となっている」といつている(三〇頁)。
- (13) 植木朝子「波と鼓・聞きなしの系譜」『日本文学』一九九五・一。和歌では千鳥の鳴き声が詠歌の主な対象であった。
- (14) 『諸本集成 和名類聚抄』羽族部第二八・羽族名第二百三十一。臨川書店による。
- (15) 佐藤信夫「レトリック感覚」五六頁、講談社、昭五六・一〇。
- (16) 佐藤信夫、同書、六四頁。
- (17) 『おくの細道』「象潟」の段に、
 岩上に雉鳩の巢をみる
 波こえぬ契りありてやみさこの巢 曾良
 という句がある。この句が「君をおきてあだしこころをわがもたば末の松山波も越えなむ」(古今集・東歌)、また、「契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山波越さじとは」(後拾遺集・恋四)を踏まえていることはあきらかだが、この句に「みさこ」が「契り」とともに詠まれうるのは、「みさこ」が『詩経』によって、「男女の結合の象徴」として理解されたことによる。萬葉歌の例が、すべて「恋歌」であるのは、このことにかかわっているように。しかし、平安和歌をつうじて、みさこは「男女の結合」という人事的な理解において享受されることはなかった。「みさこ」を詠む歌を一覧しても、「男女の仲」を含蓄するものをみいだせない。王朝和歌では、「みさこ」は、ただ、「海浜の栖」のみが(本意)として問題にされつづけたのである。長明が、独りで住むべき「飯の庵」に、「男女の結合の象徴」としての雉鳩をもちだして

くるともかんがえられない。「方丈記」は、王朝和歌の教養によつて「みさごは荒磯にゐる」と書き述べたにちがひなかつたが、「人をおそる、」という意味賦与において、和歌的伝統をずらすのである。

(18) 注2の浅見論。

(19) 岩波・新古典大系「方丈記 徒然草」・解説(佐竹昭広、三六一頁)。

(20) 長明の「ひぐらし」歌は、『正治第二度百首』「暮」題に、「けふもまた誰かはとふとながめやる岡辺のまつにひぐらしのこゑ」とある。

(21) 注19の佐竹論、三六一頁。

(22) 大曾根章介「兼濟と独善―隠逸思想の一考察―」(『仏教文学研究』第八集) 参照。

(23) 岩波文庫脚注 三二二頁、岩波・新古典大系脚注 二二二頁。

(24) 芹、茅花は和歌の題材ではあつた。「いかにせむみかきが原に摘む芹のねにのみなけど知る人のなき」(千載・恋一・六六八)、「茅花生ひし小野の芝生の朝露をぬきちらしける玉かとぞ見る」(久安百首・露・五八八)、「すみれ咲く横野の茅花さきぬれば思ひ思ひに人通ふなり」(山家集・一〇一五)、ほか。掛詞や比喩として用いられ、また美的観賞の対象であることがわかる。〈食〉の世界には縁遠い。「岩梨」「零余子」は和歌の題材ではない。

(25) たとえば、「深山木のかけ野の下のした蕨萌え出づれども知る人もなし」・千載集・春上・三四。

(26) 注2所掲、浅見論。

(27) 注2所掲、浅見論。

(一九九七年四月三十日受理)

Does “an Osprey” fear “people”?

—On the relations between Hojio=ki and Japanese poem in Heian period—

Zenzaburo SHIMONISHI*

ABSTRACT

It has been indicated that the expressions of Hojio=ki written by Chomei Kamo, who lived in the 12th century, were under the influence of 31-syllable Japanese poems in Heian period. In this paper, on the contrary, I pointed out the aspects of deviation rather than the influence in Hojio=ki. “MISAGO(an osprey)” is a case in point. “MISAGO(an osprey)” was the word generally used in Japanese poem in Heian period. Yet it was given a new meaning in Hojio=ki. The expressions of Hojio=ki had the authorized usages, and they also would go over beyond them as well.

* Division of Languages
Department of Japanese Language